

中華民國史研究の展望

山 田 辰 雄

只今、森征一法学部長ならびに国分良成教授から過分のご紹介の言葉をいただきました。この機会に常々考えていること、これからやりたいと思っていることについて話をさせていただきたいと思えます。

最初に申し上げたいことは、私は先輩達の最終講義に度々出席しましたが、それらと一つ違うことは、私にとって大変幸せなことに、自分が指導を受けた先生に聞いてもらえるということであり、私の指導教授の石川忠雄先生がお忙しいなかをご列席くださったことは大変嬉しいと同時に緊張しております。

本日の話は、一面ではくだけたものになると同時に、他面では極めて専門的な話になり、説明しなければわかりにくいところがあるかもしれません。時間の関係で少し説明を省くところもありますが、ご容赦いただきたいと思えます。

本日は、「中華民國史研究の展望」という題を設定いたしました。これは過去の研究の回顧ではありません。私は少し意地をはっているとありますが、まだ過去の回顧はしたくないという気持ちです。むしろ私は残された問題、これからやりたい課題に行きつくために過去の問題に批判的に言及していきたいと思っております。

今日の私の話の手がかりとなる言葉は三つあります。第一は水平的発展、第二は垂直的発展、そして第三は相対化ということです。これらについては、これからの話の中で展開していきます。

私は法学部政治学科で中国政治史を担当してきました。これは、一八四〇年のアヘン戦争から、現代の中国政治までを扱います。これは法学部では古い伝統のある科目でありまして、私は石川忠雄先生の跡を継いでこの科目を担当しましたが、石川先生の前には及川恒忠先生という立派な先生がおられました。

しかし、中国政治の研究が発展していくにつれて、中華人民共和国とその前の中華民国の時期を分けて考えるようになりました。今では現代中国論という科目がありまして、これは国分教授が担当しており、主として現代中国の政治、外交の問題を扱っています。私はどちらかという一九四九年以前の政治史を担当してまいりましたが、常に中華人民共和国の政治を意識して講義してきました。私の最も関心が強いところは、一九一二年に始まる中華民国から一九四九年の中華人民共和国成立までの時期でありまして、これは現在「中国政治史II」という科目となっており、高橋伸夫助教授が跡を継ぐことになっています。

この中国政治史という科目が大学にあるというのは、私共慶應義塾の人間にとつては当たり前のようですけど、大変贅沢なことで、こんな科目が日本の大学をみてもいくつあるだろうか、そんなに沢山はありません。まして、企業の研究所やマスコミなどでこういう問題を専門的に研究しているところはほとんどありません。かつて日本国際問題研究所やアジア経済研究所がこのような研究をやっておりましたけど、今はもう駄目です。後に述べますが、現在の中国の政治を理解するためには、過去の歴史、特に近い過去の歴史がわからなければならぬと私は考えております。こういう問題を研究し、教育できるのは実は大学だけであります。これこそが大学が担っていくべき最も重要な任務だと思えます。最近は大学改革と称して、世におもねるような「面白い」授業が増えております。しかし、大学が人間の文明の継承者として本当に果たすべき役割は、基礎的な研究、世の中があま

り注目しなくても、将来の社会が必要とする研究をすることであります。私は、それが大学の第一の使命であると思っております。そのような使命を果した上で、大学が多様化していくことは大変結構なことであります。現在の大学はこういうことを忘れていないでしょうか。慶應義塾は社会に優秀な人材を多数送り出すと同時に、もう一つの重要な使命は研究者を再生産しなくてはならないということです。研究者を作り出せる大学はそんなに沢山ありません。慶應義塾は、そのような数少ない大学の一つであります。私は、そのような一つの科目を三十余年にわたり慶應義塾ですつと担当してこれたことを大変誇りに思っておりますし、また、贅沢なことであるとも思っております。この仕事はまだ終りません。これからも続きます。

私は、さきほどご紹介しましたように、学生時代に石川忠雄先生のゼミの門をたたきました。先生は名著『中国共産党史研究』を出された直後で、それはちょうど私が学生の時代でした。実は私は法律学科の学生でしたが、この時先生のゼミに入ろうと思ひ政治学科へ転科しました。今でもそうですが、法律学科から政治学科へ転科する学生はまずおりません。何年かに一人いればいいところです。そのかわり、そういう学生は問題意識をもっている学生ですから、良い学生なんです。私はそういう数少ない学生の一人でした。

石川門下は面白いところで、私以外はみんな中国共産党の研究をやっていました。私だけなんだか知らないが孫文や国民党などに興味をもってしまったのです。面白いことに、石川先生の前の及川先生は国民党を研究されていて、その弟子の石川先生は共産党史の研究をおやりになり、その次の私が国民党史をやり、そして私の後に来る高橋君が私のところでは珍しく共産党の研究をやっていきます。これは、ある意味で慶應義塾の良さというか、そこにはなにも先生のやっつてゐることを真似しなくてもよいという自由な雰囲気があります。まあ、石川門下で中国共産党の研究をした人がみんな先生の真似をしたとは言いませんけど、そういう良きジンクスがありました。これは、私にとって非常に都合の良いことでした。つまり、石川ゼミにゐることによって、中国共産党に関する

高度な知識を得ることができ、自分で研究しなくともまわりの人がやっていますから、そこから常に知識が入ってきました。それは非常にレベルの高いものですから、その知識をもって学界で議論しても通じるというような環境でした。私は国民党のことを研究しましたけども、共産党のことも半分ぐらいやっているのと同じなんです。これは、私にとっては素晴らしい研究環境でした。

しかし、そういうなかでも中国を見ていく上で共産党だけで中国を理解できるのだろうかという疑問が常になりました。この問題にぶつかって、これからお話しすることと関連するのですが、大きな示唆を得たのが、一九五二年に石川先生が書かれた『中国憲法史』という本からでした。これは、通信教育の教材として書かれたもので、あまりみなが注目しませんでした。石川先生が書かれた『中国共産党史研究』は一九五九年の出版ですからその前に書かれたものです。先生が文化勲章を受賞されたひとつの理由が中国憲法史の研究なんです。この通信教育の教材に最も高い価値を見出したのは私だと思っています。これがなぜ私にとって意義があったかと申しますと、それは政治史を背景として清朝末期以来の中国の憲法の発展の跡をたどったものだったからです。そこでは憲法や政治制度を中心として、軍閥、国民党、共産党の相互関係が見事に描かれています。それは、さきほど言いましたように共産党だけをやっている中国を理解できるかという問題に対して正面から答えてくれる書物でした。私は初めはその点が分からなかったのですが、通信教育の採点をするために何回もこの書物を読んでいくうちに、そこから重要な示唆を得たのです。

そもそも政治の発展、つまり政治がどちらの方向に行くのかを考える場合に政治史のなかで重要なことは、権保持者とそれに対する挑戦者（革命勢力）の力関係を正しく判断すること、どちらが勝つかということを正しく判断することであります。ご存知のように、一九四九年以前の中国において政権を掌握していたのは、共産党ではなくて軍閥であり、国民党でした。しかし、これまでの研究はこの軍閥や国民党の分析が十分に行われない

ところで中国政治を理解しようとしていたのです。つまり現実には、この国民党や軍閥の研究なくして中国共産党の統治が語られているのです。このことがなぜ問題であるかは、単に過去の問題だけでなく、実は現代の問題にも関係しているのです。このような歴史的理解が欠けているために日本の中国研究は、少し厳しい言い方をすれば、きわめて基本的な誤りを犯してきました。

一九八九年に天安門事件が起きました。この時、一部の人々の間に中国の民主化への期待がありました。また、当時はソ連、東欧の社会主義の崩壊の時期であり、中国の社会主義も崩壊するのではないかと、希望的観測もありました。しかし、現実にはそれは誤りでした。そのひとつの理由は、挑戦者としての学生や知識人の民主化要求ばかりに焦点を当て、政権保持者としての共産党や政府・軍の力を十分に分析していなかったのです。歴史的な観点から見れば、あの当時共産党の政権が倒れないということは常識なんです。当時中国では農民が動かなかった。農民は改革・開放の受益者ですから動く必要がない。農民が動かないということは軍隊が動かないということでした。辛亥革命の時の経験に照らせば、軍隊には農民出身者が多い、農民の不満が軍隊を動揺させました。したがって、その農民が動かないということは兵士もあまり動揺しないということでした。そういう場合に政府はそう簡単には倒れないという常識が通じなかったのです。それは何故かというと、政権保持者と挑戦者を相対化して両者の力関係を分析して政治の動向を考えなかったことが原因でした。先の問題に戻りますと、過去において共産党の運動がどうであったかという問題は、軍閥や国民党との力関係の分析の中でしか考えることができないということです。しかし、それまでの研究は国民党や軍閥の研究を充分しないで共産党の勝利を語っていました。このような批判が私の研究の出発点でした。

二〇世紀の中国、特に中華民国時期にはいろいろ政治勢力がありました。軍閥、国民党、そして第三勢力などがあり、私はそれらをひとまず共通の立場に置いてその相互関係を見ていく、そして、それぞれの政治勢力の路

線や政策を相対化して見ていこうとしました。ここに、相対化という言葉が出てきます。これが私の中華民国史研究の視角です。これは私の特殊な言葉使いですけれども、民国史観、中華民国史観と称し、この考え方を学界に提起して参りました。そのような問題意識に基づいて私は国民党の研究をやってきました。しかし、私の国民党の研究は先程申しましたように、共産党の研究を排除したのではなく、石川ゼミにおける共産党研究の成果の上に立った国民党研究であったということをご理解いただきたいと思えます。

中国革命は、結果的には国民党と共産党に二極分解しました。こういう状況のなかで、一方の立場に自らの身を置いて他方を研究する、そういう中国研究の在り方に対し私は違和感を持ちました。時には、政治的に共産党につき、あるいは国民党についていたりする研究者も一部にはおりました。私が二〇〇三〇歳の頃、そもそも国民党を研究すること自体が何か政治的に反動的であると思われる時代もありました。そういう学界の風潮に反発しました。私は決して国民党支持者ではありませんが、そういう学問の在り方に大いに反発しました。もっと自由な研究がしたい。慶應義塾はいいところで、その自由を認めてくれました。誰も注目しない研究を一〇年、一五年許してくれました。まわり全部が共産党の研究をしている石川ゼミのなかでそういうことができたのです。私は本当にゼミの在り方、慶應義塾の学問の在り方に感謝しています。そういう人間が中国政治史だけを専門科目と称して三十年やってこれたというのは、大学としては大変贅沢な人の雇い方であって、慶應義塾でなくてはこんなことはできなかつたと思っております。

私は国民党左派の研究を始めました。左派の研究のなかでも、名前をご存知かもしれませんが、汪精衛らに焦点をあてました。これがまた評判の悪い人物なんです。彼は日中戦争中日本との和平をとなえ、日本の傀儡政権を作りました。だから中国大陸においても、台湾においても、中国語で言う「漢奸」つまり裏切り者なんです。そういう理由で、大陸においても、台湾においてもほとんど研究が行われていませんでした。そういうこと

を私が研究するのですから、これまた評判が悪いと言うか、勝手なことをやっているとということになるわけです。

なぜこのよう問題を選んだのか、それは私の中国政治に対する見方と関連しているのであります。国民党左派というのは、一方における蔣介石の国民党と、もう一方における毛沢東の共産党との間のある種の間派的立場に立った人達なんです。だから、左派というのは、蔣介石とも毛沢東とも違う面と、同時に共通する面を持っているのです。このような左派の研究は私が先程言いましたように、あらゆる政治勢力を共通の場に置いて、その相互関係を研究しようとする私の考え方に合致していました。このような考え方がなければ、左派の問題は恐らく取り上げなかったと思います。私は、特定の政治路線、あるいは政治勢力の立場に依らないで、中国全体の政治勢力の相互関係を追及するなかで、現代中国を理解してみようと思いました。私がこのような考え方を持ったのは、今から約三〇年前になりました。中国でも近年このような研究がだんだん盛んになって参りました。日本でもこの考え方が受け入れられて、今では日本の中国政治史研究の主流になった感があります。

私がここでもう一つ言いたいのは、それでは共産党史の研究はどうなるのかということ。とかく学界というのはやはりに流されるものでありまして、少し流れに逆らう瘦せ我慢が必要なんです。それをやらないで今は何となく中華民國の研究が盛んになってきています。しかし、共産党の歴史の研究は非常に重要なものです。昔は共産党研究の資料がなくて困っていました。しかし今は沢山あり過ぎるくらいです。それなのにやらないのはおかしい。みんな逃げています。大量の資料を読んでちゃんとした研究をまとめることは容易なことではありません。昔限られた資料のなかで、資料がないと言ってやっていたら良かっただけですが、今はもう状況が変わりました。中華民國史の研究が盛んになることは大変結構ですが、今こそ中国共産党史の研究をちゃんとやらなければいけないと思います。

私が国民党左派を取り上げたもう一つの動機は、日本の国民党研究が孫文研究だけで終わっていて、しかも孫文

研究だけやっているともう行き詰まってしまい、そこでやめてしまう人もいました。私が考えたのは、孫文をさらに理解するためには、国民党のその後の発展からもう一度孫文を見なおしてみようということでした。そこで、孫文に近い関係にあった国民党左派の人達の研究を始めました。今申し上げたことは、研究の回顧ではなく、明らかに私の意識のなかでは、これまでの中国研究の在り方を批判しているのです。その批判は現在に対する批判と結びついています。

さらに私は、一九八〇年頃から別な視角から問題を考えるようになりました。一九七八年以後の改革・開放政策のなかで中国は発展してきました。ここでまた、中国は変わったと騒がれました。確かに中国は変わりました。私も毎年中国に行っておりますから、その変わり方は分かります。しかし、経験的に見て、これにはどうも疑問が残ります。これまでの日本の中国研究はどうも時代の趨勢のなかで中国をとらえ、その方向のなかで変化を見出していこうとする傾向がありました。例えば、一九五〇年代において、多くの人は中華民国時期から中国社会主義が生まれてくる過程を跡付けようとした。さらに、一九六〇年代から七〇年代にかけて文化大革命が起こり、そこに新しい社会主義を見出そうとしました。それから、一九七八年以降になりますと、改革・開放のなかにまた新しい変化を見出そうとしているわけです。本当にそうなのか、どうも現象を見えますと政治史的な意味で連続性がそこにはないのだろうか、という疑問を持つようになりました。

一九八九年天安門事件が起こりました。繰り返しになりますが、この中国社会の変化の上に立って民主化を期待し、ソ連・東欧社会主義政権の崩壊からの類推により中国社会主義の崩壊を予測する、それは誤りであったことが結果的には証明されました。そこでは、研究の方法における論理的整合性が欠けていると思います。物事が変わる場合には、変化する前の状態、つまり連続性を確認しなければ変わったということが言えないのであります。卑近な例ですが、太った人に対してあなた痩せましたねと言えるのは、痩せる前の太った状態を知っている

からです。そのような論法からすれば、学問的に文化大革命の解明なくしての中国が変わったとは言えないはず
です。そこで天安門事件を通して、二〇世紀全体の中国政治の連続性を考えてみたいと思うようになりました。

私は三つの連続性の要素を見出すことができました。第一は、アイデンティティ、つまり中国人の帰属意識で
あります。そのとき設定したのは、伝統的アイデンティティと国民国家的アイデンティティです。伝統的アイデ
ンティティは、清朝の盛んであった乾隆帝時代の領土感覚からひき継がれてきたものです。その統治は朝貢体制
によって支えられていましたが、その支配の範囲が中国あるいは中華と認識されていきました。しかし、この朝貢
体制下の周辺地域、例えば、ウイグル、チベットそしてモンゴルもそうですが、これらの地域に対する支配は、
それぞれの地域の独自性、文化的な独立を認められた緩やかな支配でありました。しかし、現在の中国指導者や知識
人はそこが中国と想っているわけです。その後二〇世紀になると、中国は近代国家を樹立しようとしています。近代
的國家の重要な特徴は中央の権力がくまなく国境の内部にまで浸透するということとして、税金が北京でも広東
でも、そしてウイグル自治区でも一律に取れるということです。これを私は国民国家的アイデンティティと呼び
ます。そうしますと、本来伝統的アイデンティティのなかでは緩やかな支配であったところに、国民国家的アイ
デンティティによって中央の権力を浸透させていこうとする、ここに中国が歴史的に引き継いできた連続性と現
実との矛盾が生じてきます。

第二の要素として、私は党の排他的支配という言葉を使いました。簡単に言えば、それは独裁、権力の集中と
いう形をとって現れます。この排他的支配がどうして生まれてきたのか、その原因についてここでは細かく申し
上げるつもりはありませんが、ひとつ重要なのは、中国の主要な政治勢力が独自の支配地域と独自の軍隊をもつ
ていたということです。今でもそうなんです。中華人民共和国の軍隊は、国の軍隊であるまえに共産党の軍隊な
のです。中華民国時期をみれば、国民党の支配する領域は限られていて、国民党は独自の軍隊をもっていました。

それに対して共産党も、農村革命根拠地と独自の軍隊をもっていました。さらにさかのぼっていけば、軍閥も同じような支配の仕方をしていました。そこには異なった政治勢力がお互いに共通の枠組のなかで権力を争うという、制度的な保証がありませんでした。政党間あるいは政治勢力間の対立は、生きるか死ぬか、つまり、独自の軍隊と独自の支配地域をもってそれを取るか取られるかの闘いになっていたのでした。

そのことが、政党の排他的支配に結びついていました。まさに、一九八九年の天安門事件で鄧小平が学生の運動を動乱であると認定したのは、絶対的な党の独裁体制に反対派が出てきたからです。われわれは、一〇〇万や二〇〇万の学生が来ても共産党政権は倒れないと見ていましたが、共産党の指導者から見ればそれは生死をかけた闘争であるということになります。まさに反対派との闘争は歴史的に培われてきた連続性の意識の中にあつたのであります。だから、共産党はあのような弾圧の行動に出たということです。

第三の要素は、改革はエリートによる上からの指導によらねばならず、市民的な参加の自由を許さないということです。だから学生が民主化を要求しても共産党や政府が許さなかつたのです。

少し説明が不十分かも知れませんが、私はこのような連続性の側面を見ながら天安門事件を観察し、さらにこれを二〇世紀中国の政治全体に広げて考えていこうとしました。それは、中華民国と中華人民共和国の政治的連続性の追求であります。この点を、例えば、袁世凱、孫文、蔣介石、毛沢東、鄧小平という政治指導者の思想のなかにどのようにたどることができるか考えてみました。一〇年ほど前まではほとんど誰もこの問題に注目しませんでした。最近では学界でも取り上げるようになり、恐らく今後は中国政治史研究の重要な課題となっていくのではないかと考えています。このような研究は、先程申しましたようにいろいろな政治勢力を水平に並べて相互関係を見ていこうとするのに対して、むしろ連続性を考えていくなかで現代中国の政治を考えてみようとするものです。私はそれを垂直的發展と呼んでおきたいと思えます。

私が今までやってきたことを通して、過去の中国政治史研究の在り方を批判的に述べてきました。これからが重要です。残された課題ということで、私がやろうとしてこれまでやれなかった問題、あるいはこれから更に研究していかねばならない問題を取りあげようと思います。その中で最大の問題は、今申し上げました歴史的連続性の問題であります。さらに、党と社会の問題があります。政治史の研究においては当然のことですが、政党の政策、路線が中心になってきました。しかし、共産党にせよ国民党にせよ、それが中国社会のなかで活動してきた政党である以上、現実の支配がどのように社会に浸透していったかということをもっと実証的に研究していかなければならないと思います。今日、いろいろな意味で社会史が盛んになってきています。問題は社会史を研究する場合、どれだけ政治勢力を意識しているのか、例えば疫病の研究がどのように政治勢力に関わってくるのか、このような問題意識が必要であると思います。

それから、私が少し手をつけてまだ完成していない問題としましては、先程申しました政治勢力の相互関係、中華民國史観に基づく研究があります。第一次国共合作の問題、日中戦争における長期的抗日戦略の問題、つまり蒋介石の安内攘外論、共産党の抗日民族統一戦論そして汪精衛の和平救国論などの相互関係を考えていく必要があります。これについて私は今まで少し研究をやりましたが、まだ不十分です。各政治勢力の相互関係という観点から中国の政治史全体を見ていきたいと思っています。日本と中国の近代史とは相互に密接な関係があります。ある局面においては歴史認識をめぐる政治的対立を生み出していることは皆さんご存知の通りです。この問題もしっかり学術的に研究していかなければならないと考えております。今私は、日、米、中、三国の国際共同研究として日中戦争の研究に取り組んでいます。それから、全然手をつけていませんが、時間がきたらやってみたいと思っているのは歴史資料としての新聞や雑誌に掲載された広告の分析です。これはものすごい量の資料ですが、まだ誰も使っていません。これをどう使うか、その方法を考えてみたいと思っています。

私がなぜ中国にこだわるのか。勿論、中国が好きだからと言えはそれまでですが、それだけではありません。そこには、より広い文明の問題があり、世界の歴史の問題が内包されています。私がかねがね注目しているのは、中国の近代化の過程は外からの要因ではなく、内部からの発展によって動かされているという考え方であり、特に今日のように世界的に普遍的なものを要求される時代において、それぞれの文化や民族は自分が何であるかという問題にぶつかる、つまり、自分のアイデンティティを見出そうとします。私は人間の文明というのは単一の方角に進むことはないであろうと見ています。その意味で、グローバルな普遍性を押しつけるイデオロギーが支配的な今日の世界で、中国文化の独自性とは何かを考えてみるのが重要です。だから最近中国は普通の国になったという考え方がありますが、私はそれに反対です。むしろ、グローバルな基準が押しつけられれば押しつけられるほど中国は何か、ということをも中国人自らが問わなければならない時代が必ず来るのであって、そういう徴候は現在でも見えています。

今日、近代化の産物としての環境問題があります。中国はこの問題をどのように解決するのか、あるいは解決できないのか、ということを知りたいです。それはまた、日本の問題でもあります。人間がこの近代化の産物としての環境問題をどう解決し、どう生き延びるのかということが、今日突きつけられている問題なのです。人間より弱いパンダがどうすれば生き延びることができるのか、ということ突き止めることは人間の生存にとっても重要な問題です。パンダにとって良くない環境は人間にとっても良い環境ではありません。これらが、私にとって残された問題であると同時に、これからやってみたい問題であり、今日の話の重点はこの部分にあります。私は慶應義塾を去りますけれども、これらの問題についての研究は今後も続けていきたいと思っています。

最後になりますが、思いついたことを二、三申しあげます。

ひとつは、學術の國際交流の問題です。學術の國際交流の持つ意義については私がここで説明する必要はありませんが、自分の學術活動の一部として國際交流にはそれなりの努力をして参りました。

古い話になりますが、明治の文豪に漱石と鷗外がおります。ご存知のように、漱石はイギリスに、鷗外はドイツに留学しました。私はこの二人の作家にある種の親しみを持って、ベルリンに行ったとき、ロンドンに行ったとき、それぞれの下宿を訪ねてきました。特に感慨深かったのは、ベルリンの鷗外の下宿でした。そこは、今は日本文化研究センターか何かになっているはずですが、東ドイツのフンボルト大学で博士論文の審査に来てくれと言われ、その場所で立ちあつたことがあります。ちょうど、ベルリンのかべの崩壊した時でした。一九九〇年の一月だったと思います。それはそれとして、漱石は、イギリスそしてヨーロッパの文化に接し、日本はヨーロッパの真似をしてはいけない、日本独自の文学を作らなくてはいけないと考え、彼は非常に悩み、うつうつとした留学生生活を送った人であります。それに対して鷗外はドイツ語もうまくなって、さらに女性とも親しくなつて、女性が日本に追いかけてくるという、まあなかなかすばらしい留学生生活を送った人です。私は漱石と鷗外には親しみと尊敬をもつていますが、ある意味で二人は異なつた留学生生活を送つたわけです。しかし、両者には共通した点があります。彼らが日本に帰つてきて、何人の欧米の学者を日本に招いたでしょうか。私の知る限り、彼らが一人も意味ある研究者を日本に連れて来た記録はありません。私は専門家ではありませんので、間違っていたら教えて下さい。それは、彼らが背負つていた明治の限界なのです。しかし、われわれはその態度をいまだに引きずつていないでしょうか。國際交流というと、言葉を覚えて、外国へ出ることはかり考えています。戦後われわれの先輩がアメリカへ行くことによつて多くのことを学び、それが日米の相互理解に役立つたことは事実ですが、それは当時のアメリカに力があつたからです。しかし、ここまで発展してきた日本は國際交流に対してこれでもいいのか、私は常々疑問に思つています。今の日本の国力を考えると、國際交流で一回外国に招

かれたら三回日本に呼んでしかるべきである、日本は今そういう立場にあります。このことを皆さんに申し上げておきたいと思います。

学生諸君に言っておきたいのは、私のゼミで勉強した諸君はお分かりのように、私は気難しくて、ある時は結構キツイことを言った教師だったと思います。ただ私が学生諸君に望んだことは、慶應義塾の卒業生として恥ずかしくないだけの教養を身につけて欲しい、それは自分で物を考え論理を構成し、正確な文章を書けるということです。このために私は指導してきました。

大学院の諸君に対しては、独立した研究者の養成を心がけてきました。その場合私が一番気をつけたことは、大学院の学生達が提起する問題のなかにどのようなようにして積極的意義を見出すかということでした。もし、教師がそこに意義を見出さなければ学生の問題意識をつぶしてしまうことになってしまいます。これは教師として最大の罪悪であると考えて、できるだけ大学院の学生諸君に対しては出してきた問題のなかにどれだけ学問的意義があるかを見出すつもりで彼らに接してきました。

最後に、私の好きなエピソードがあります。ゴルフの名手であるジャック・ニクラウスが私にたまたま一九九四年にアメリカで生活していた時、テレビでつぎのように話していました。それは、あのジャック・ニクラウスでさえスランプにおちいった時は、「自分の最初に習ったときのフォームに戻り、その上で新しいフォームを考える」という趣旨のことを言っていました。私はこれは仲々いいことを言うなと思いました。私はつぎのように考えました。つまり、不確かな中国の未来をどう考えるかという問題に直面したときどうしたら良いのか。ニクラウスの言うように、前にもどる、すなわち、中国の過去の歴史構造、歴史的連続性を確認し、変わらない連続性の将来における変化を考えてみる必要があるかと思えます。その意味で、歴史研究を意識しない中国研究は、時流に流されるだけのものであると思います。一九八九年の天安門事件の時もそのような経験をしました。

そんなことを考えながら、私は慶應義塾を去りますが、三田に愛着を持ちながら研究と教育をもう少し続けていきたいと思っております。ご静聴有難うございました。

(二〇〇二年一月一七日)